高齢化社会における児童公園の利用方策について

秋田大学　正　員　　清水浩志郎
秋田大学　正　員　　木村　一裕
秋田大学　学生員　○古山　広功

1．はじめに

現在、高齢化が進んでいる社会においては、高齢者によって豊富な知識や経験を還元してもらい、豊かで活力ある社会を創出することが重要であると思われる。そのためには、何かとひきこもりがちな高齢者が積極的に社会参加できる組織、社会環境づくりが必須の条件となるだろう。しかしながら、「高齢者の社会参加の場」「高齢者のコミュニケーションの場」などとしての身近な施設は少なく、高齢者の中には病院をコミュニケーションの場として利用している人さえみられるのが現状である。したがって、高齢者の社会参加ができる社会環境づくりが必要となろう。

そこで、高齢者が身近に利用できると施設として児童公園（250Mおきにある）に着目する。現在、表－１に示したように、新興住宅地のような平均年齢の若い地域では、幼児の利用が中心である第一期利用がみられ、またこのような地域よりやや平均年齢が高い地域では、児童の利用が中心である第二期、第三期利用がそれぞれみられる。すなわち、地域の各世代に対応した児童公園の利用が考えられるわけであり、児童公園にもひとつのライフサイクルがあるといえる。今後考えられる公園利用は高齢者による第四期利用であろう。都市部などの旧市街地においては、子供の利用が減少し、子供の姿がみられない公園もあるようである。これは居住区域の郊外化による平均年齢の上昇、いわゆる地域の高齢化に起因しているものと思われ、このような公園の多くは放置されたままの状態であり、有効な利用が考えられなければならない。そこで公園をうまく利用するためには２通りの方策が検討できよう。第一の方法としては、旧市街地に多くみられるような利用度の低い公園を高齢者が利用しやすい施設に再整備することである。また、第二の方法として、現在新興住宅地のような年齢の比較的若い地域においても、将来旧市街地のようになる危険性は十分に考えられるため、このような公園についても第二～四期利用に対応した公園づくりの必要性があるだろう。

以上の認識にから、本報告では高齢者に対してアンケート調査を行い、現在利用率の低い第三期後半から第四期へのステージにある児童公園の再利用形態や公園内の施設の種類や配置、及び第一～三期公園における幼・児童との共存可能性などについて高齢者の視点を分析することを目的としている。

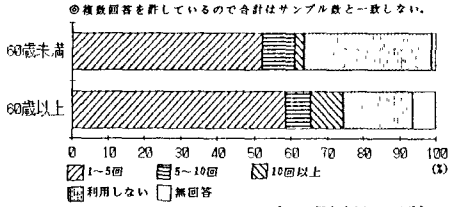
表－１　児童公園の利用期

公園利用期	利用者	代表される利用目的	現在ある施設	その他考えられる遊び
第一期利用	幼児	砂遊び	遊具 ブランコ・スベリ台 子供神・砂場・回転塔 ジャングルジム 砂山 広場	水遊び 岩のぼり 木のぼり 雪遊び ソリ スキー
第二期利用	児童（低学年）	遊具の利用		
第三期利用	児童（高学年）	キャッチボール等の運動	植木・芝生	
○中学生以上になると児童公園の利用はほとんどみられない。 ○大人は幼児と一緒以外は利用がほとんどみられない。				
第四期利用	高齢者	ゲートボール 休憩、散歩	広場 ベンチ	?

表－２年齢別児童公園利用目的　（　）内は人数構成比

	６０歳未満	６０歳以上	合　計
散　策	28 (37.8)	72 (34.4)	100 (35.3)
子供を遊ばせる	15 (20.3)	33 (15.8)	48 (17.0)
スポーツ	10 (13.5)	31 (14.8)	41 (14.4)
自然観賞	14 (18.9)	30 (14.4)	44 (15.5)
知人・友人との談話	4 (5.4)	20 (9.6)	24 (8.5)
読　書	0 (0.0)	3 (1.4)	3 (1.1)
その他	3 (4.1)	20 (9.6)	23 (8.1)
合　計	74 (100)	209 (100)	283 (100)

◎複数回答を許しているので合計はサンプル数と一致しない。



図－１　１カ月の児童公園利用回数

2．調査と利用実態

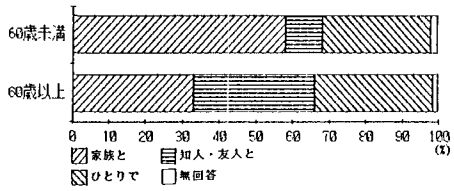
アンケートは、児童公園の利用状況や利用意識などについて20歳以上の人に対して実施し、分析には回答者266人（60歳以上 187人、60歳未満 79人）のデータを用いた。

児童公園を利用している人は、60歳未満で63.3%、60歳以上では74.3%に達している。しかし、図－１

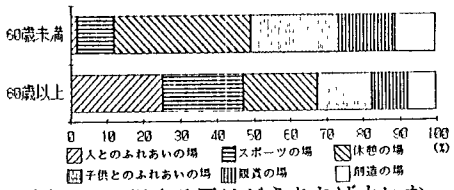
に示したように、高齢者、若年層とも「月に1回～5回」が50％以上を占め、その利用回数は少ない。これらの人々が公園を利用するときの相手を図－２に示した。これによれば60歳未満では、「家族」が58％を占め、家族の中でも「子供」と利用することが多い。これは、若年層は自分以外の人に利用させるために同伴しているものと考えられる。60歳以上では、「知人・友人と」「家族と」がともに33.1％、「一人で」が32.4％と、この３通りの形態がほぼ同じ割合をとっている。このことから、若年層と比べて高齢者は知人・友人との利用が高く、自分の意志で利用としているといえよう。また、これらは高齢者の利用目的に影響してくると考えられる。そこで表－２では児童公園の利用目的について分析した。60歳未満ては「散策」37.8％、ついで「子供を遊ばせる」20.3％、「自然観賞」18.9％が多い割合をとっている。60歳以上においても「散策」34.4％「子供を遊ばせる」15.8％、「スポーツ」14.8％が多くなっている。これらから若年層は自然に親しむ場として公園を使うことが多いが、高齢者はスポーツする場として利用していることが特徴としてあげられよう。このように、高齢者は友人・知人とスポーツを楽しむために公園を利用していることから、高齢者による児童公園の第四期利用は、十分考えられるであろう。

３．今後の児童公園に対する利用意識

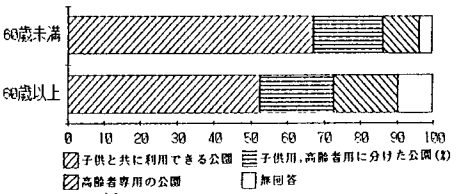
最初に、高齢者が公園利用するときの利用形態を見ると（図－３）、60歳未満では「休憩の場」としての利用が32.6％ともっとも多く、次いで「鑑賞の場」としての利用が21.1％となっている。一方、60歳以上では「人とのふれ合いの場」（25.2％）や「スポーツの場」（21.9％）、「休憩の場」（20. 3％）となっており、高齢者が公園をコミュニケーションの場として利用を考えていることがわかる。このようにコミュニケーションの場として利用するにあたり、高齢者が利用しやすい公園を考えることは必要なことである。この認識から、図－４は高齢者からみた公園の理想を示したものである。もっとも多い項目は60歳未満、60歳以上ともに子供と一緒に利用できる公園をあげている。このことは、高齢者の意識の中に、公園は世代をこえて利用すべきであるとの考えがあることを示している。さらに、図－５の公園の環境をみると、60歳未満では植物に関するものがもっとも大きい値をとっているのに対し、60歳以上では大きな木に関すものをあげている。しかし両者ともに緑化に関係したもので、公園は緑多いものでなければならないとの強い意識がうかがえよう。



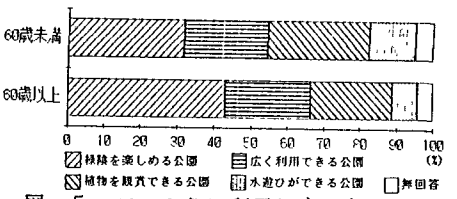
図－２　児童公園における利用相手



図－３　児童公園はどうあればよいか



図－４　どのような公園がよいか



図－５　どのように利用したいか

５．むすび

本報告では、高齢化社会における児童公園の位置づけを明確にすることから、高齢者の公園に対する利用実態を分析し、さらに意識構造からみた将来の児童公園のあり方を考察した。その結果、いくつかの示唆すべき点を得た。今後、地域のライフサイクルを考慮することにより、地域別の将来をみた場合の児童公園のあり方など、より詳しい分析を進めたいと考えている。